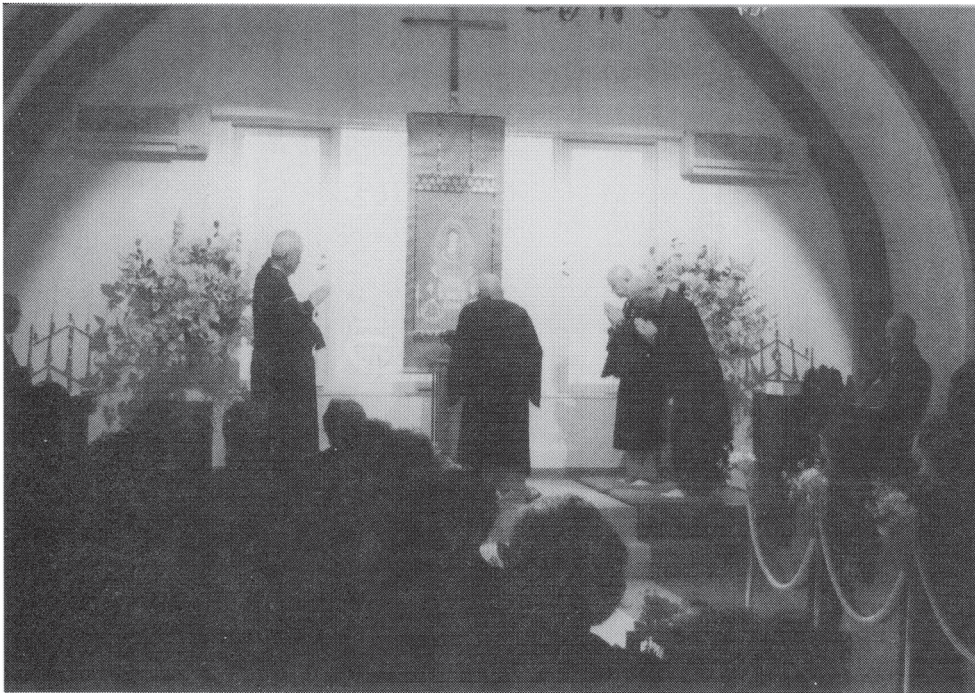


この心 あまつ空にも花そのふ
三世の仏に たてまつらばや



県北梅花二十周年記念研修会でのチャペル奉詠



平成19年2月10日

第26号

発行 梅花流師範・詠範の会
会長 柴田弘一
題字 初代会長・故加藤信三師
編集者(広報部) 亀谷 隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
五城目町 待月院 嶋森憲雄
電話 (0188-52-9566)

「輪」と「和」をひろめよう

秋田県梅花流師範・詠範の会 柴田弘一

平成十九年は穏やかに明け、この一年、みなさまにとりまして佳き年であり
ますよう三朝大般若祈禱で祈念いたしました。

昨秋、私の寺でははじめて「講員一泊研修会」を開催致しましたところ沢山
の方々のご参加ご協力に依り、はじめての試みの「輪袈裟授与式」も厳粛且つ
感激のうちに挙行出来、共に「梅花のこころ」を学び合えた貴重な時間であり
ました。

県南はウエルサンピア由利での一泊研修会が行われました。県北は一泊研修
会二十周年を記念して、大滝温泉富士屋ホテルを会場に、梅花研修はもとより
夜の懇親会での演芸会、そして二日目朝は、ホテルに付属した結婚式専用のチ
ャペルでのおつとめ、独特の雰囲気の中で荘厳に挙行されて皆の心に深く印象
付けられたことと思われまます。

今回の講習の中で、現代世相の様々な目に余る出来事についても話題にのぼ
りました。携帯電話やテレビゲーム、ビデオやインターネットなどの功罪につ
いてや、学校教育や家庭でのしつけ、親の生き方等々数え上げればキリがない
ほどでありましたが、身近なことで出来ることのなかに、「あいさつ」や「マ
ナー」は子供が幼少の頃から教えて上げないといけない、と言うことが共通し
て出された意見でした。

私たちは梅花を通しての仲間だけではなく、家庭ではもちろんのこと、まわ
りの人達に接する時にも「おちかい」にある「仲良い生活をいたします」「明
るい世の中をつくりまます」の願いを強く心にもって精進して参りたいものです。
「身近なひとりに良くしてあげる」ことが「輪」を広げ、更に「和」をひろめ
て行くのだ、と心して仏教徒としてのこの努力目標をあなたも実行して行きま
しょう。

おだやかな年でありますように。

合掌

※今回の同行誌、昨年大阪府管内を特派巡回された佐藤俊晃師(龍泉寺住
職)を介し「高嶺」についての特別寄稿を下さいました。大坂慈恩寺住
職吉川信隆師の高見識と研鑽の深さに敬服致すと共に、ご好意に深く感
謝を申し上げます。

梅花のつどい

講員一泊研修会のおもいで

中央 秋田赤金足 東泉寺 一泊研修に思う

清源寺梅花講員 高橋 恵子

九月二十一〜二十二日の二日間にわたり、師範
会会長柴田先生のお寺、東泉寺様において行われ
た中央地区講員一泊研修に参加させて頂きました。
一泊二日の講習は規律ある研修生活の中で楽し
く勉強出来ましたことは、偏に講師の先生方、ま
た各ご住職様の細かいご配慮のお陰と心より感謝
申し上げます。



輪袈裟授与式にて、感激のひとつときの筆者

輪袈裟授与式
は初めての事で
したので、柴田
先生、柳川先生
の前で順番を待
つ間は何となく
緊張を覚えまし
たが、柴田先生
の「おめでとう
」のお言葉をかけ



三世十方の諸仏を道場に勧請す

て頂いた時は、梅花講の一員である喜びを感じま
した。講習は根本である所作をはじめ、教典の中
の詩の内容を良く理解し、たしかな音程で曲を覚
え、記号を正確に…この一つ一つをしつかり身に
付けるには練習以外の何ものもないと思えました。

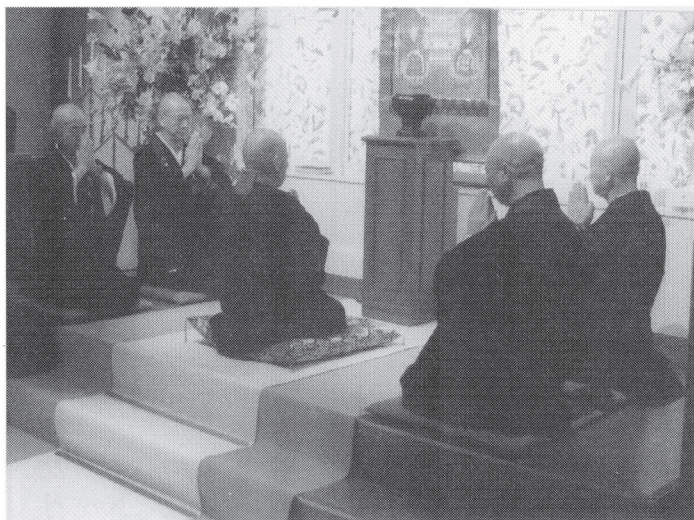


授与式を終えて 晴れやかに…

練習の大切さ、ご指導の中で再々の確認をさせ
て頂きました。私自身を納得させる為にも初心に
かえり原点からの練習が必要と反省させられると
ころが多くありました。今後も事情の許すかぎり
参加させて頂きたいと思えます。

数々の講習に何の心配もなく集中する事が出来
ましたのは心のこもった食事のお世話や目に見え
ない所でいろいろなお気遣いをして下さった皆さ
んのお陰でございます。

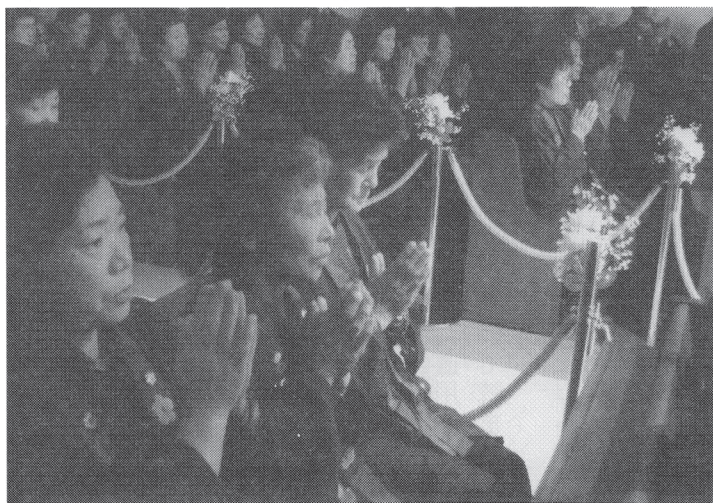
楽しく充実した一泊研修に参加できました事の
幸せを、すべてに感謝いたします。
誠にありがとうございます。



今捧ぐこの御灯明、まことの道を照らしたまえ

県北 大館市大滝温泉富士屋ホテル
 県北梅花二十周年記念
大滝温泉一泊研修会
開催報告

今回は県北地区で一泊研修をはじめて二十回目という節目に当たります。これを記念してこの度は温泉に泊まったの研修会になりました。昭和六十一年に上杉の太平寺で開催して以来第二回宗福寺、梅林寺くと回数を重ね今日に到



神仏にかける願いはあらたかや

りました。お寺での開催のため、食事、お手洗い、寝具飯台机、暖房機器などの会場準備に大変なお手を掛けましたが、それでも会場寺院では寺檀一体となつて手厚くもてなして頂きました。参加者としては、ご本尊前での奉詠、座禅、朝課、萬燈供養、精進料理、一曲集中講座、歌詞解説、特別所作練習、そして本堂での寝泊まりと朝のお粥という、うれしくもドキドキする充実した内容でしたので、喜びに加えて信仰心も育まれたことでしょう。今回は二十周年記念として大滝温泉の富士屋

ホテルでの開催となりました。最初の講習では太平寺亀谷健樹師範が「お誓い」と「秋田県梅花講の歌」の解説と梅花健康法、一泊研修の思い出等を語り、午後からは分科講習、浴衣に着替えての記念懇親会では、県北梅花の最古参になる全忠寺佐藤仁鳳師範をお迎えしての楽しい宴になりました。各講員さんの歌、踊り、隠し芸と続き、桜田勝夫さんの巧みな宴会芸も飛び出して大いに盛り上がり、師範さん達のコーラスで締めくくりました。

翌日は、朝のお勤めとしてホテルに併設してある教会（チャペル）にての正法御和讃、供華の奉詠。エレクトーンの響く中、白いパーズンロードの上を導師が入場し、ステンドグラスとスポットライトの輝く正面には一仏両祖の軸を掛けて合掌礼拝する。と、その上には十字架。前代未聞のお勤めでしたが、宗教を越えてありがたく新鮮な気持ちになりました。



桜田さんの鈴鉦ならぬ一升瓶の音頭とり見事な打ち返しでした

最後の全体講習では東泉寺柴田師範が「まごころに生きる」を研修し、記念講習は無事終了致しました。

梅花のふるさと

詠讚歌の生まれた風景（その五）

祖神のねむる杜 入佐山

特別寄稿 大阪府池田市 慈恩寺

梅花流特派師範 吉川信隆

大聖釈迦牟尼如来讃仰御詠歌

今もなお鷲の高嶺に月ぞすむ

人は入佐の山とおもえど

御詠 奥龍玄楼禅師

◇鷲の高嶺と入佐山◇

「鷲の高嶺」とは、お釈迦様が成道なされて、涅槃に入られるまでの、四十五年間説法の坐とされた「靈鷲山」のことを、こうも呼ぶ。

歌の中に「月」とか「花」が読まれる時、それは人物を表すと言われる。ここではお釈迦様のこ

とを指し、「真如の月」とも表現して仰ぐ。

「入佐の山」の発祥の由来は未だにはつきりしない。もともと固有な山ではなく、信仰上象徴的な意味合いと、歌人等の枕詞から表現された、共に象徴的意味合いの深い山である。

その前者の一つは、兵庫県出石町にある但馬の国の祖神「天日槍」が眠る出石神社の杜の辺りをそう呼ぶ。祖神を慕う土地の人びとにより、信仰上象徴的な山となったのである。

後者の一つは、順徳天皇が歌集の中に「月が入る」「入る月」といった「月」にかけての枕詞として多く歌い込み、世に広めたために多く知られるところとなったようである。

現在は沢庵和尚の寺「崇鏡寺」の古墳群のある辺りを、「入佐山」と称している。

作者は、但馬の名僧、浜坂町諸寄龍満寺、奥龍玄楼禅師。その禅師の歌集『道用桑偈』のなかにある、「常在靈鷲山」について読まれた一首である。

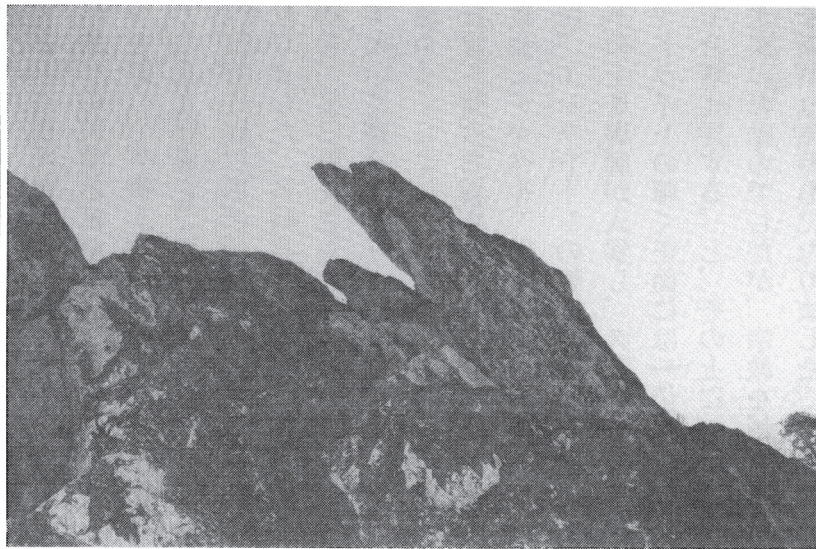
ところで、あまり世に知られていないその歌集の一首が、どうして詠讚歌になったのかという疑問が湧くが、それは龍満寺と、梅花流詠讚歌作詞

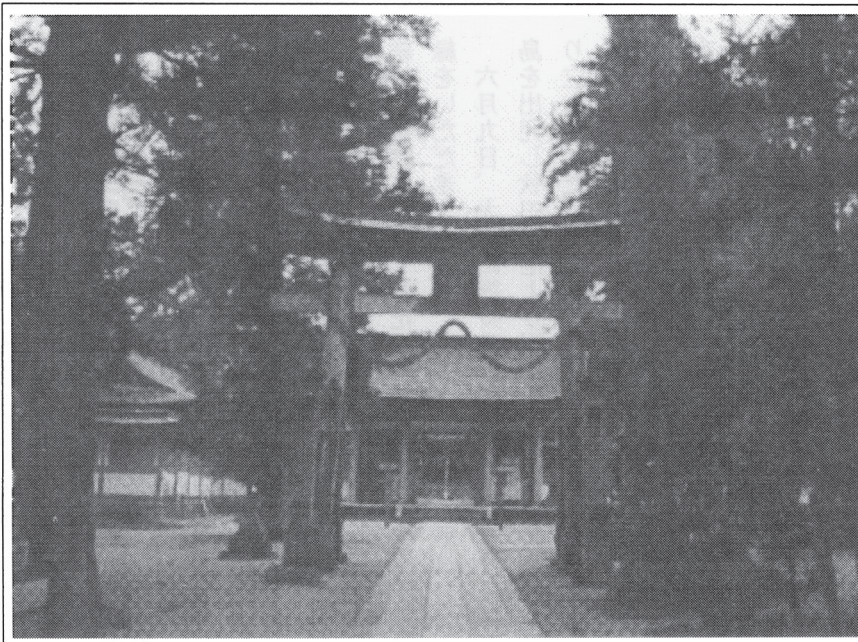
者赤松月船老師のご寺坊・岡山県矢掛の洞松寺とが、本末関係であったということから容易に理解出来る。

この禅師は、「狼玄楼」として恐れられていたが、この歌を味わえば味わうほど、その呼び名からは想像だに出来ない優しく素晴らしい歌の響きが感じられる。詠讚歌（釈尊讃仰）という趣の世界に、なんの違和感も感じられない格調高い歌となっている。赤松先生の快挙である。

【 靈 鷲 山 】

釈尊が永遠に説法を続けている場所、と『法華経』に記された信仰の山





【出石神社】

兵庫県豊岡市出石町宮内にある。奈良時代の創建と伝えられ、祭神に天日槍命（アメノヒボコノミコト）を祀る。社殿によると、天日槍命は、もと朝鮮半島・新羅国の王子であったが、垂仁天皇の時、日本へ渡来し、但馬国の神の娘と結婚し、この地に定住したと伝えられる。出石神社は但馬国一の宮。土地の人びとは、この神社のある一帯を、「入佐山」と呼んでいる。

◇ 釈尊請仰への道しるべ ◇

さて「大意」を味わってみましょう。
我われ仏教徒にとつての聖地・インドの「靈鷲山」、そこはかつて釈尊説法の坐であった。今はその姿はすでに無けれども「今もなお」我われ仏教徒の心の支えとなつて、人の道・仏の道としての「道しるべ」となっている。

但馬に入佐の山という山がある。人はその山を見てその辺の山としか思わないかもしれないが、実は国造り祖神が、今も宿り眠り続ける「祖神の杜」であつた。

そこも靈鷲山と同様に、祖の姿はすでにこの世に無いけれども、「今もなお」在はすがごとくその神を温かく祀り、暮らしとともに祖の神の山に向かう人びとの姿がある。

我われにとつて、この但馬の土地の人びとの日常底の「心」には大いに学ぶところがある。

「常在靈鷲山」から、釈尊の声に今いちど聞き入つて、教祖釈尊への讃仰の心を、この一首をよすがとして、詠道に活かし唱えつつ「道しるべ」としたいものである。

〈余録〉祭神「天日槍」は、新羅からの渡来人。いまでも土地の人びとは、日韓シンボジュウムと交流を続けている。その子孫は「タジマモロスク」から続くのであるが、「但馬」という地名は、この名から名づけたと伝わる。《古事記天日槍系譜》



【奥龍玄楼禪師】

玄楼禪師（一七二〇—一八一三）は伊勢出身。一七六七年、四十八歳にして龍満寺に二十六年間在住す。後、宇治興聖寺二十二世となる。世寿九十四歳。師の家風は厳格で知られ、世に「狼玄楼」という呼び名が伝えられている。

本稿は、大阪府にお住いの特派師範・吉川信隆師範より、特別に寄稿いただいたものです（写真も一緒に提供いただきました）。
吉川師範は、実際にインドの靈鷲山や、兵庫の入佐山伝承の地に足を運ばれて、調査されました。「高嶺」御詠歌に関する、貴重な御研究の成果です。（編集部）

おらほの梅花講特別寄稿 龍源寺梅花講十五周年記念旅行を終えて

龍源寺梅花講員

小野

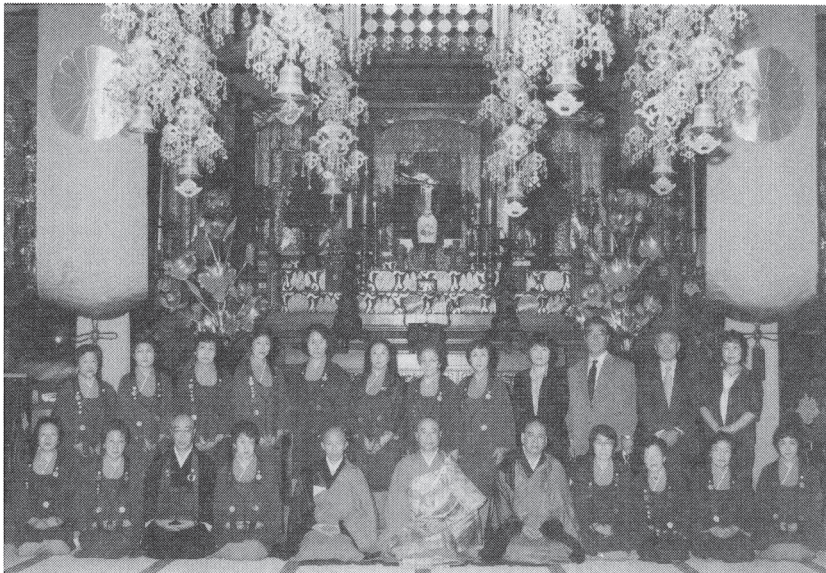
久ひさ

梅花流が長い歴史の中、私達龍源寺梅花講はやと今年十五年の節目を迎え、その記念として大本山総持寺祖院に於いて梅花奉詠をさせていただける縁をいただきました。

六月九日、大本山総持寺祖院に向けて早朝五時矢島を出発し秋田空港より羽田経由にて能登空港に降り立ちました。直ちにバスにて御本山へと直行、祖院では金沢市希翁院御方丈様が門前までお出迎え下さり恐縮しながら後に続きました。新緑の目映い静寂な境内に入り、そこに立つ荘厳な大楼門や多くの伽藍を見上げたとき思わず身が引き締まる心洗われる思いが致しました。

控えの間にてお茶を頂戴し、昼食は美しく盛りつけられた御本山の精進料理でした。雲水さんの指導に従い「五観の偈」をお唱えし、大変おいしく一品一品味わいながら頂きました。休む間もなく梅花服に着替え、打ち出しの鐘が全山に響く中、一同緊張の面持ちで菊の御紋の柱掛けが印象的な大法堂へと案内されました。荘厳な空気が流れる中、御導師様が入堂され、当梅花講員物故者並びに講員先祖代々の大法要が開始されました。物故者の面影を偲び又先祖を偲び、こうして厳肅な大法要をただけましたことに心より感謝申し上げ胸の熱くなる想いで冥

この感激は生涯忘れることの出来ない思い出となる事と思えます。全てを終えた後、法要御導師様、来賓皆様と供に写真撮影、大事な記念の一枚となり



前列左より二人目が筆者 (祖院法堂にて)

福を念じて参りました。法要の後はいよいよ奉詠です。緊張の中瑩山禪師様の御尊前にて梅花奉詠心を込め只ひたすらに十曲お唱えをさせていただきました。

ました。法要、奉詠の後は緊張もすっかり解け諸堂拝観を致し、総持寺祖院の面影を胸に刻み別れを告げ、一路和倉温泉に向かいました。宿ではゆつくりと温泉を堪能し、夜は歌あり踊りありの大宴会「十五周年記念祝賀会」が開催されました。褒賞状の授与式もあり宴会も賑やかな大変楽しいひとときでありました。

二日目は観光と百万石祭りの見物でした。最初に市民の台所近江市場でショッピングを楽しみ、愈々まつり会場棧敷席に移動、一等席から豪華絢爛時代絵巻、俳優の高嶋政宏さん扮する前田利家公の大名行列、四百年に亘る加賀鷹を始めとする百万石の伝統文化に目を見張るばかりでした。夕食は由緒ある料亭つば甚にて加賀懐石料理を堪能させていただきました。格調高きお座敷、お料理、仲居さん方の立ち居振る舞い、言葉遣いに至るまで、賓客を迎えるおもてなしの心を勉強出来たように思います。

三日目は市内観光、武家屋敷や東茶屋街など数々の加賀文化を忍び又、日本三大名園の一つ兼六園を見学、その後も一つのお目当て加賀銘菓を求めて諸江屋さんへ、どっさりお土産を買い込み、三日間の行程も無事に終え、一同元気で帰路に着きました。今度の記念旅行の素晴らしさは心に残る法要、梅花奉詠は勿論ですが、講員が三日間一緒に更に楽しく過ごす事ができ、大変意義深い思い出として終生残る旅行だったと思います。二十周年を楽しみに又梅花に精進の日々を送りたいと思います。

最後に我が講師円通寺方丈様、旅行にあたり微に入り、細に入り企画して下さいました講長先生に感謝と御礼を申し上げます。

心のハーモニー 海外へ

尺八・琴・詠讃歌による

「日本の調べ」

ドイツ公演に参加して

安宗寺住職 丸岡公樹

今年の去る五月二十二日から二十九日までの日程で、「日本の調べ」と題してドイツ公演に参加させていただきました。と申しましても、梅花師範でもない私が参加するのはいささか心苦しい思いでした。しかし、昨年来玉鳳院様か



十字架キリスト像の前にて奉詠

ら、ドイツ公演のお誘いを受けていたこともあり、ましてや今年はドイツがサッカーワールドカップの開催国となれば、頭の中はドイツ一色このチャンス逃したら今後、ドイツなど行く機会は無かろうと思いい同行させていただきました。この度のドイツ公演は、ドイツ・パッサウ市のレオポルディウムコンサートホール（高校の講堂）とアイゼンブッフ地区にある普門寺の二会場で行われました。

その公演の中で、ことに印象に残ったことは一回目の公演会場のことでした。入って最初に仰天したのは、なんとステージ正面にキリスト像が、その御前で詠讃歌のお唱えを聞くのは、何とも異様な光景です。会場設営リハーサルの後いよいよコンサートが幕を開けました。聴衆は百人以上ホールは満員、実のところ私も全公演を聴くのは初めてでした。恐らく地元の人にとつて、着物姿・尺八・琴などを目にするのは初めてでありましょう。私の感じでは聴衆の大半は、日本の古典音楽の世界に魅了されていたようでした。キリスト像の前で聞く『高祖常陽大師第一番御詠歌』は大変感激致しました。公演の小休止中、私の周りに数名の方が、なにやらドイツ語で話し掛けてきました。何を言っているのかサッパリ解りませんが、身振り手振りやどうやら改良衣と絡子のことを尋ねていたようでした。終わりには写真を次々と撮られ冷や汗を掻いた次第です。公演終了後は、聴衆の方に琴・尺八を体験していただき、振袖姿の演奏者と記念写真を撮影したりと、終始和



アイゼンブッフ大悲山普門寺にて

やかな国際親善の雰囲気でした。二回目の公演

会場である普門寺は、メルヘン漂う田園風景の小さな村にあり、伽藍はお寺というよりもごく普通の民家を思わせる造りでした。真新しい本堂、座禅堂など整備されており随所に禅・日本文化が見え隠れし、異国・異文化での仏教伝道活動の難しさと堂頭様のご苦勞をひしひしと感じさせられました。普門寺公演では『三宝三華』曲頭の散華荘嚴に特別参加をさせて頂いたことが何より嬉しく一番の思い出になりました。

この度の公演では、不肖私が事務局（会計）というお役目を頂き、ほんのわずかでは有りませんが、日独文化友好のお手伝いが出来たのではないかと自分なりに喜んでおります。最後にこの貴重なご縁を頂きました。団長の自性院様をはじめご参加の師範の方々には心よりお礼を申し上げます。合掌

ちよっとぶじょほう ~梅花つれづれ~

梅花特訓中!!

ただがむしやらに



八峰町 正伝寺副住職 村松良周

その時はただがむしやらで、気がつく
と時間がオーバーしてしまいました。何をど
う過ごしたか覚えていません。ただ習う
だけでなく「教える」ことの重要さを実
感しました。僧堂から戻って五年、ほ
ぼ同じ年月梅花を学んできました。もう
五年かと思う反面、まだこんな実力かと
鈴をとる度に思います。

今期、師範の先生方のお勧めや、宗務
所からの推薦を頂いて本庁の梅花師範養
成所に行っておりです。大任を与えられ
緊張しつつ六月の第一回目の養成所に向
かいました。やはり各宗務所の代表が集
まるだけあってなんとも言えない独特の
雰囲気があるにはありました。落ちこぼ
れないかという不安最後まで研修を全う
しなければというプレッシャー、さまざ
まな負の感覚とともに最初の五日間が始
まりました。初めは本場の基礎、梅花譜
の読み方、鈴鉦の扱い方などと、よく耳
にする曲の講習で、私は復習感覚で、受

講しておりました。また、所員の多くは
無級か梅花を始めたばかりで、それもか
なり拍子抜けな気がしました。そして少
し安心して最初の五日間の講習を終える
ことができました。

しかし、十月の第二回目の養成所で私
は思い知らされました。多くの所員がた
った四ヶ月の間に格段に上達してきてい
たのです。私の中には最初のあの負の感
覚が再燃してきました。そして一人ひと
りのお唱えを聞く度にその感覚が大きく
なっていました。その五日間で尻に火
が点きました。本当に恐ろしいところに
来てしまった気がします。

今回の梅花講習員一泊講習会はその一週
間後に開催されました。丁度第二回目
の養成所で尻に火が点いた状態で迎えるこ
とになりました。事務局として裏方に徹
するはずでしたが、初めてのことで何も
要領を得ず、保坂先生や会場主の柳川先
生には大変ご苦労をおかけしてしまっ
たことを申し訳なく思います。そして会場
の準備、講習や飯台の細かな計画、講師

の依頼等、計画内容の緻密さに驚かされ
ました。

私が一番驚いたのが、講師の欄に私の
名前があったことです。師寮寺では何度
か講習をしたことがありますが、県北中
から講習員さんが集まる規模の大きな講習
会は初めてで、正直、何をどうしてよい
のか解りませんでした。結局、何をどう
してよいのかわからないまま終わった、
というのが正直な感想です。でも「次こ
そは」と思います。次こそはしっかりと
勉強して、次こそは責任を持って、次こ
そはもっとまともな講習が出来るように
そして、貴重な機会を与えて下さった師
範の先生方や講習員さんたちに深く感謝し
ております。

その時はただがむしやらで、気がつく
と時間がオーバーしてしまいました。何をど
う過ごしたか覚えていません。ただ習う
だけでなく「教える」ことの重要さを実
感しました。そして私自身、大きく踏み
出したこの一步をステップに、さらに日
々努力していきたいと思えます。

梅花講習日程

【僧侶・寺族研修会】

〈午前10時半～午後3時半〉

- 2月16日(金) 講師 佐藤俊晃師範 課題 紫雲
4月16日(月) 講師 柳川浩二師範 課題 基本作法・立行
5月18日(金) 講師 本間俊英師範 課題 供養編
7月17日(火) 講師 山中律雄師範 課題 新曲・その他

【檀信徒講習会】

〈午前10時半～午後3時〉

- 3月16日(金) 講師 亀谷隆道・郡亮善師範 課題 同行御和讃・道交
4月13日(日) 講師 小野碩瑛・郡亮善師範 課題 追善供養御和讃・妙鐘
5月11日(金) 講師 柿崎隆穂・佐藤晃心師範 課題 四摂法御和讃・梅花
6月15日(日) 講師 森田英俊・鈴木泰賢師範 課題 入寂御和讃・溪声
7月20日(金) 講師 亀谷隆道・清水道広師範 課題 修証義御和讃・伝心



2018年7月26日

一月

- 二十日 慈光
二十七日 学道御和讃

二月

- 三日 涅槃御和讃
十日 不滅
十七日 高嶺
二十四日 妙鐘

三月

- 三日 道環
十日 正行(和)
十七日 彼岸(和)
二十四日 香華
三十一日 供華

四月

- 七日 釈尊花祭(和)
十四日 慶祝(和)
二十一日 同行(和)
二十八日 道交

五月

- 五日 追善(和)
十二日 妙鐘
十九日 良寛さま
二十六日 伝心

※ご意見、ご要望等お気軽に
お寄せ下さい。

〒0000111
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺 〇二八八七三二六七五